

そのやり方で
いいのか…?

この方法で
大丈夫か…?

—それは、経過が教えてくれます。

ベテランの経過報告の中から、確信の持てる臨床術式をつかんでください。

臨床歯科医のステップアップ研修(Ⅱ)

リスクを抱える歯列と どう向き合うか

編集 宮地建夫 / 藤関雅嗣 / 野嶋昌彦

● 昨年に発行し好評を博した『臨床歯科医のステップアップ研修(I)——リスクを持つ歯へのアプローチ』に続く姉妹編です。

● 「歯のリスク」が「現在の問題」であるとするならば、「歯列のリスク」においては、現在の状態を放置すると先々どのような問題が起きるのか、といった「将来の予測」が重要な課題となります。

● 本書では、1つのテーマに対して代表的な2症例を選び、病態の把握、リスクの判断、治療方針の決定、治療の進行といった一連の流れに沿って詳細に述べています。

● 特に治療の過程については、ステップを追って詳しく解説しているので、自分だったらこう考える、別の治療法で対応する……と追体験しながら学ぶことができます。

● ご自身の臨床を“もう少しステップアップしたい”と考える若き歯科医師の目線に立ってまとめられた充実の症例集です。ぜひご活用ください。



A4変判・168頁・写真多数
定価9,450円(税込)・¥340円

● リスクを抱える歯列とどう向き合うか 内容目次

<h2>1</h2>	<p>▶目にみえない「力」でも いろいろな現象を観察すれば はっきりと みえてくる</p> <h3>強い咬合力,ブラキシズム</h3> <p>鈴木 尚</p> <p>咬合力の問題は目にみえず,自覚症状もないが,確かに存在する重要問題である. その原因は未だ憶測の域を出ないが,臨床例を積み重ねることによって何かがみえてきている.</p>
<h2>2</h2>	<p>▶曲がりくねった道は 運転できなくはないが 整備された道は 快適な運転が可能になるだろう</p> <h3>歯列の不正</h3> <p>野嶋昌彦</p> <p>咬合平面の不揃いや歯の位置異常は,顎口腔系の機能異常を伴わなければ異常とはされない. それでは,リスクに結びつきやすい歯列の不正とは,どんなものなのだろうか.</p>
<h2>3</h2>	<p>▶奥歯がなくなった歯列は ドミノ倒しのように バタバタと倒れてしまう? 場合がある</p> <h3>臼歯部咬合崩壊</h3> <p>豊田真基</p> <p>臼歯部とは,たとえていえば堤防のようなものであり,臼歯部咬合崩壊とは堤防決壊の状態といえるであろう. その状態を招かないためにも,できるだけリスク幅を小さくする努力が必要である.</p>
<h2>4</h2>	<p>▶歯のリスクは木 歯の配置のリスクは林 咬合支持のリスクは森 木もみて 森もみる</p> <h3>リスクのある欠損形態</h3> <p>藤関雅嗣・宮地建夫</p> <p>欠損歯列というリスクは歯列の抱える様々なリスクの交差点であり,多種多様なリスクが交わりあっている. 比較的軽いリスクから難症例といわれるものまで含まれるため,治療にあたっては,どのレベルのリスクかを判断しておく必要がある.</p>
<h2>5</h2>	<p>▶顎位の不安定な歯列は 顎位を変えても不安 現状維持でも不安 効果が大いいか? リスクは小さいか? 誰でも悩む</p> <h3>顎位の不安定な歯列</h3> <p>永田省藏</p> <p>顎位の改善はリスクの高い治療であり,できれば避けたいところである. しかし,補綴が広範囲に及ぶような場合には安定した下顎位を確立するための特別な配慮が必要となる.</p>
<h2>6</h2>	<p>▶咬合の高さへの“こだわり”が 機能回復への出発点である しかし 根拠のある基準はありそうでない</p> <h3>咬合高径の問題</h3> <p>法花堂 治</p> <p>咬合高径の低下が治療の対象か否かは意見の分かれるところである. また仮に治療したとしても,咬合挙上によりまた新たなリスクを生み出すことにならないだろうか?</p>
<h2>7</h2>	<p>▶歯列を守ることは 歯面1つ1つのカリエスを読むこと それは 決して遠回りではない</p> <h3>カリエスリスクの高い歯列</h3> <p>天谷哲也</p> <p>カリエスリスクの診断なくして歯科の予防や治療を行うことは難しい. ここでは,カリエスリスクを正しく把握するために,カリオグラム法を用いた臨床例を報告する.</p>
<h2>8</h2>	<p>▶患者さんと向き合うことで 生まれる気づきが 歯列のリスクを軽減させる</p> <h3>生活習慣からくる歯列のリスク</h3> <p>三上直一郎</p> <p>歯周病やう蝕は生活習慣病といわれているが,日常臨床のどの場面で生活習慣との関係を実感されるだろうか? 患者さんとのやりとりの中から,患者さん自身に自分の問題点を意識化してもらい,対応を考えてもらうための指導法を紹介する.</p>
<h2>9</h2>	<p>▶臨床でのリスクは 起こるかどうかが 避けられるかどうか? 起こったらどうするか? である</p> <h3>リスクとの多様なかわり</h3> <p>宮地建夫・藤関雅嗣・野嶋昌彦</p> <p>個別のリスク歯と歯列全体のリスクがからみあう段階では,将来の見通しに立った治療が行われるべきだが,何が最優先かは患者と術者の意思決定による. 患者に何を伝え,何が伝えられなかったかを術者の側から報告する.</p>